

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げ＞

口永良部島では、4月に入り主に古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が多い状態で経過しています。

GNSS 連続観測では、2023年6月下旬頃から11月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており、現在も膨張した状態が維持されています。

以上のように口永良部島では火山活動が高まった状態となっていることから、本日（13日）12時35分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口及び古岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

口永良部島では、4月に入り主に古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が多い状態で経過しており、振幅のやや大きな火山性地震も発生しています。また新岳火口付近においても地震活動が継続しています。

GNSS 連続観測では2023年6月下旬頃から11月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており、現在も膨張した状態が維持されています。

口永良部島では火山活動が高まっていますので、新岳火口及び古岳火口から概ね2kmの範囲、及び向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

4月10日から12日にかけて山麓から実施した現地調査では、古岳火口付近及び新岳火口西側割れ目付近に地熱域を確認しました。地熱域の状態に特段の変化は認められませんでした。

4月以降、火山性微動及び新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されていません。また噴煙の

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

状況に変化はなく、白色の噴煙が新岳火口では最高で火口縁上200m、古岳火口では最高で火口縁上200mまで上がりました。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、4月1日に50トン、12日に30トンと少ない状態ですが、2023年6月からの活動以前と比べて多い状態です。

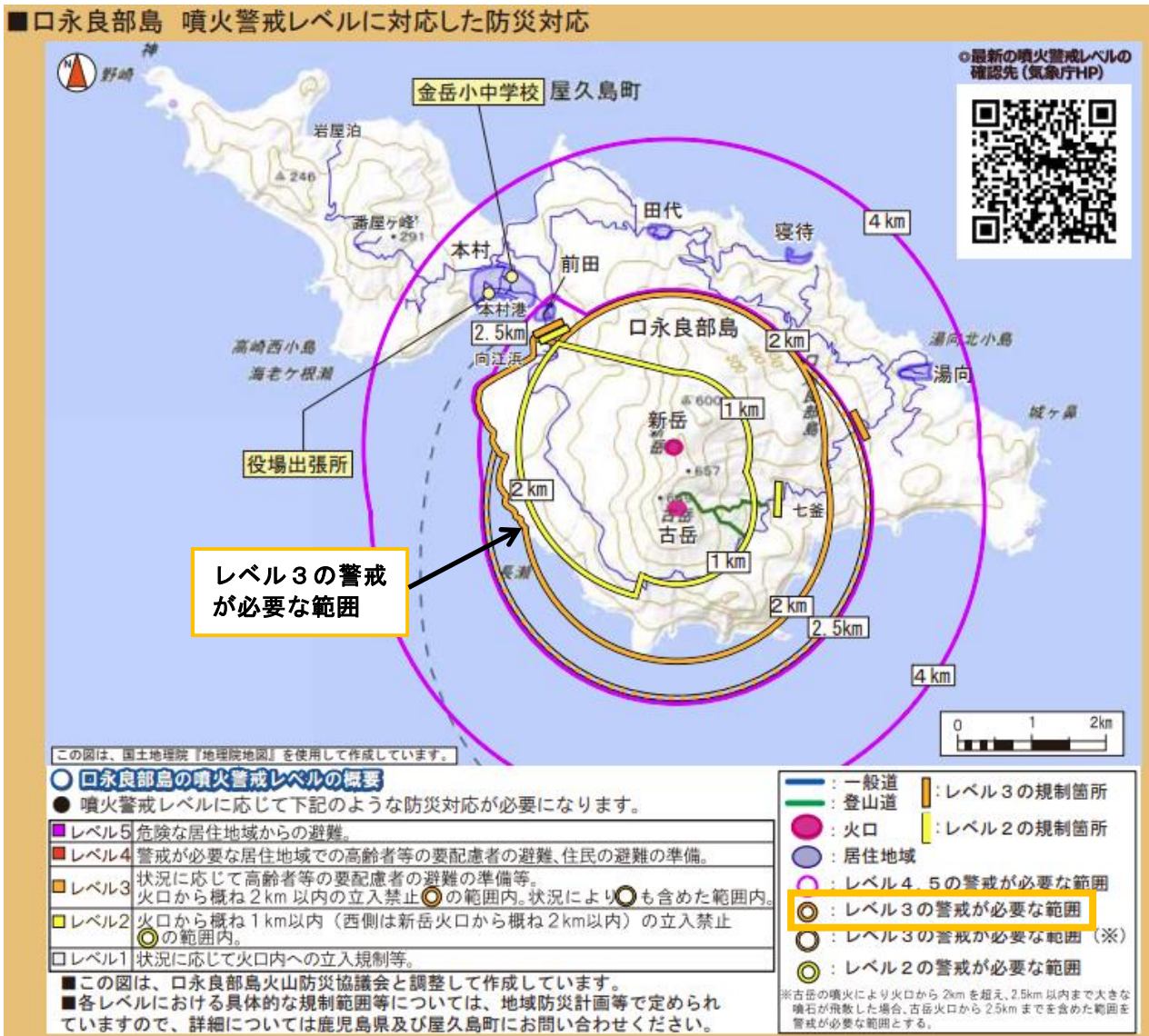


図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口及び古岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

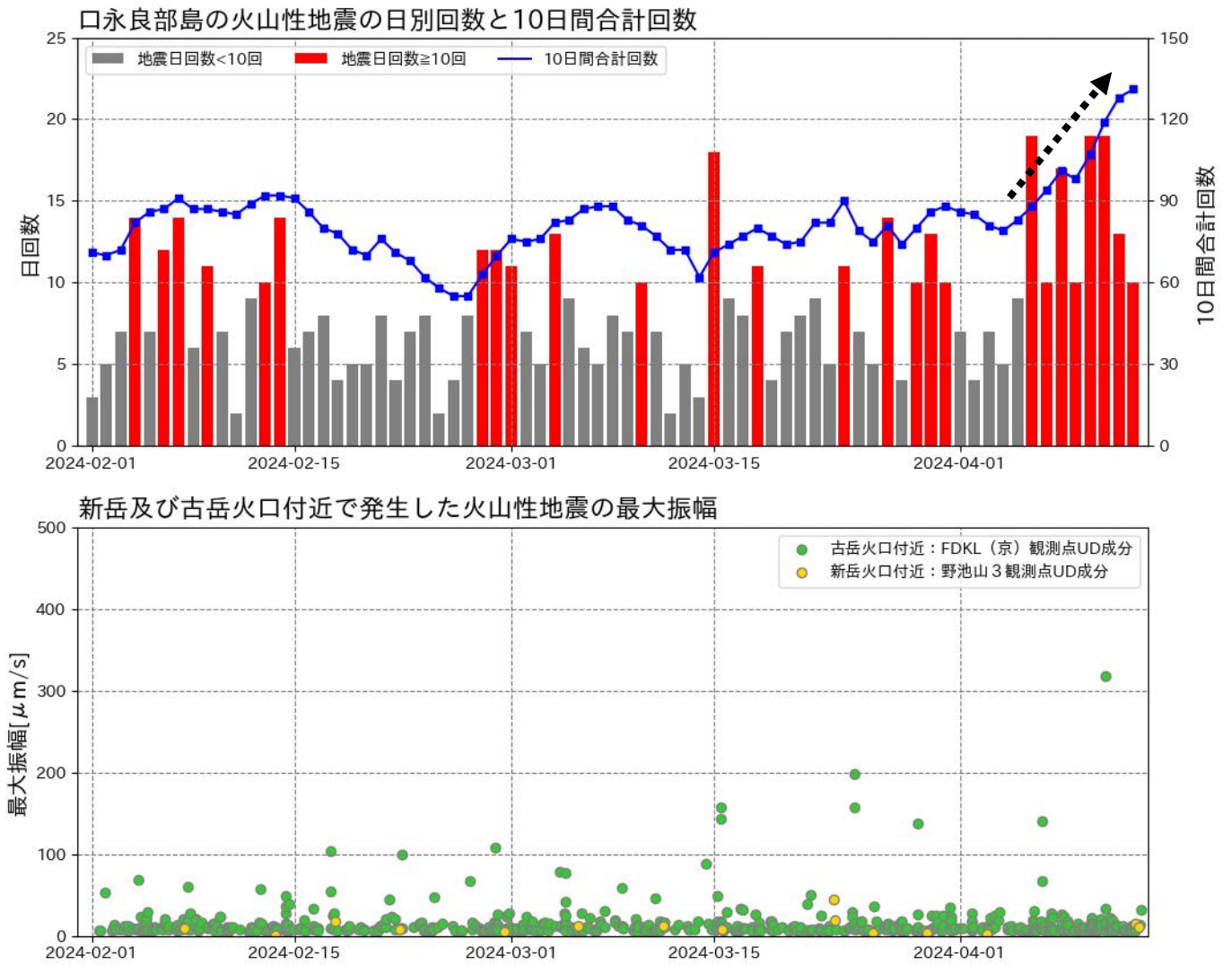


図2 口永良部島 【上段】口永良部島の火山性地震の日別回数と10日間合計回数、【下段】新岳及び古岳火口付近で発生した火山性地震の最大振幅（2024年2月1日～4月13日12時30分まで）

- ・口永良部島では、4月に入り火山性地震が多い状態で経過しています。
- ・主に古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が多い状態で経過しており、振幅のやや大きな火山性地震も発生しています。

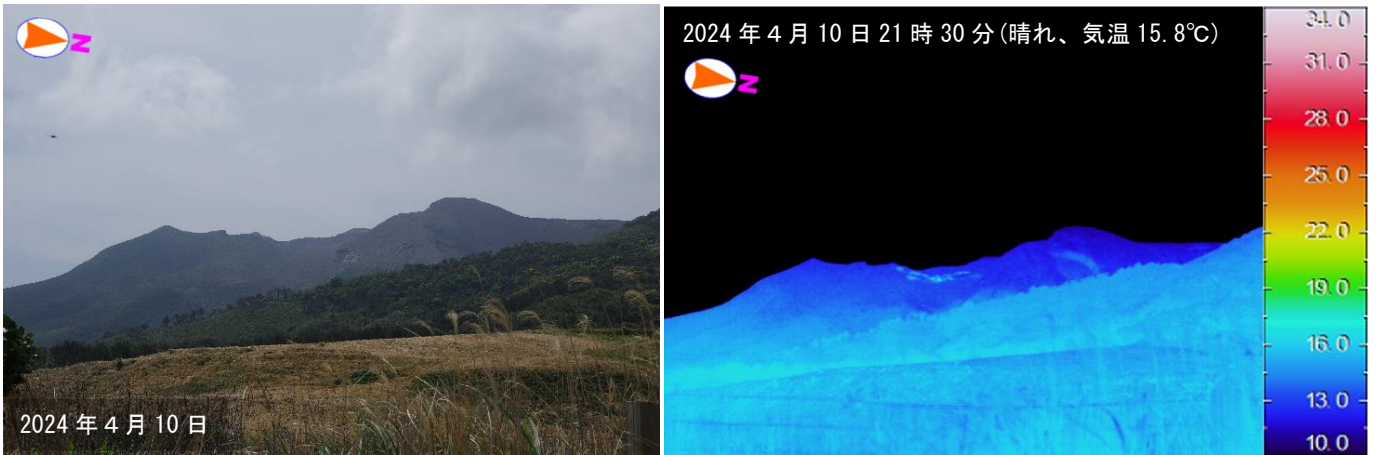


図3-1 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

4月10日から12日にかけて山麓から実施した現地調査では、古岳火口付近に地熱域を確認しました。地熱域の状態に特段の変化は認められませんでした。

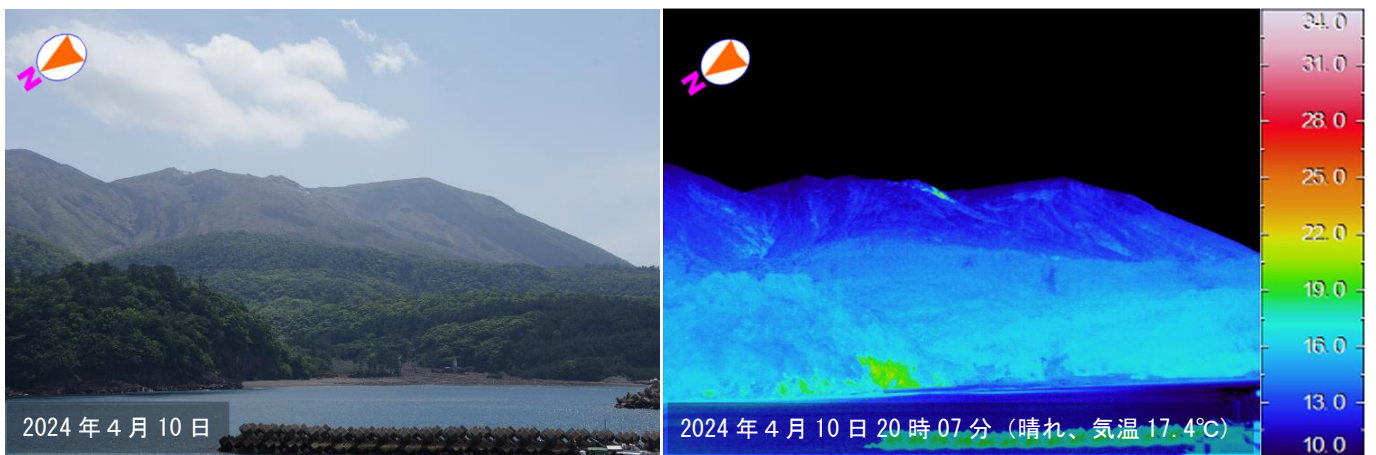


図3-2 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

4月10日から12日にかけて実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近に地熱域を確認しました。地熱域の状態に特段の変化は認められませんでした。

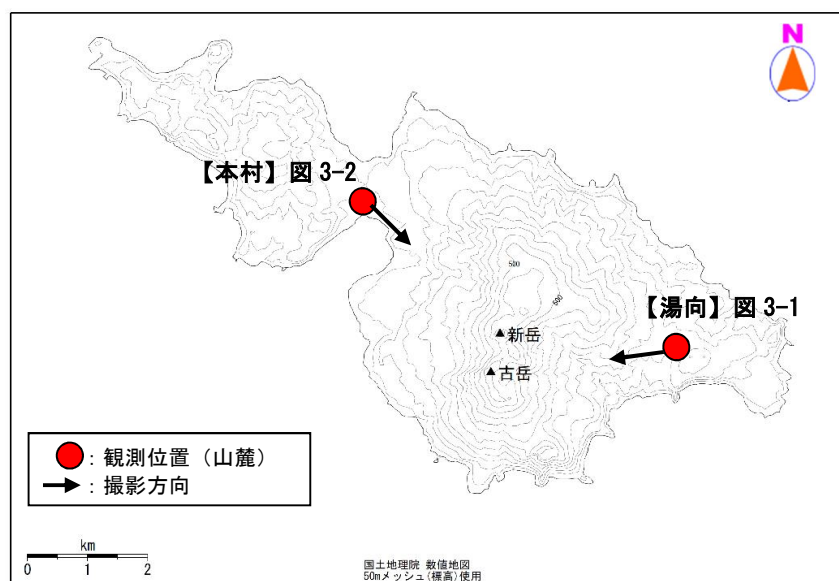


図3-3 口永良部島 山麓からの観測位置及び撮影方向

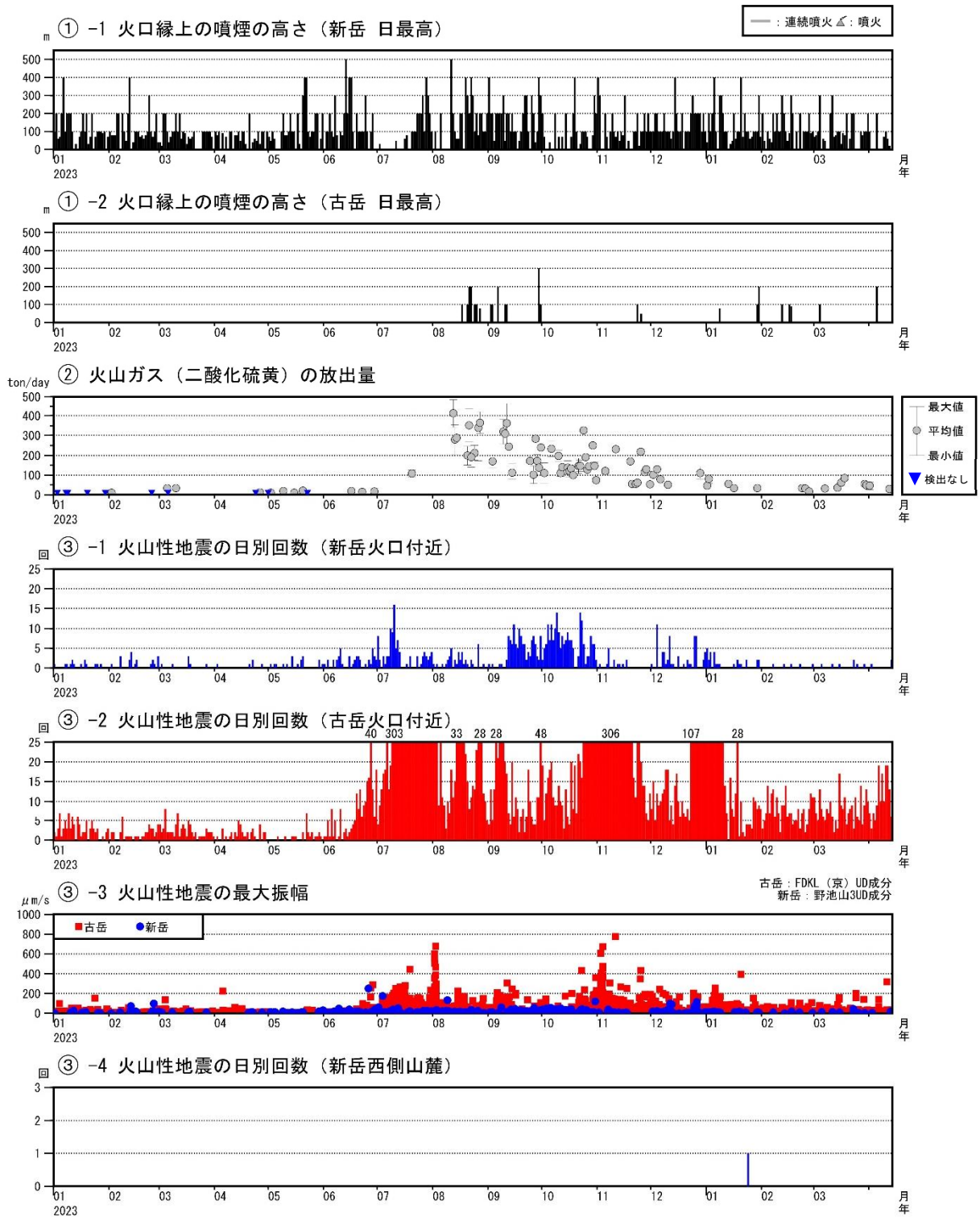


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図 (2023年1月~2024年4月13日12時30分まで)

< 4月の概況 >

- ・噴煙の状況に変化はなく、白色の噴煙が新岳火口では最高で火口縁上200m、古岳火口では最高で火口縁上200mまで上がりました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、4月1日に50トン、12日に30トンと少ない状態ですが、2023年6月からの活動以前と比べて多い状態です。
- ・4月に入り主に古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が多い状態で経過しており、振幅のやや大きな火山性地震も発生しています。また新岳火口付近においても地震活動が継続しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

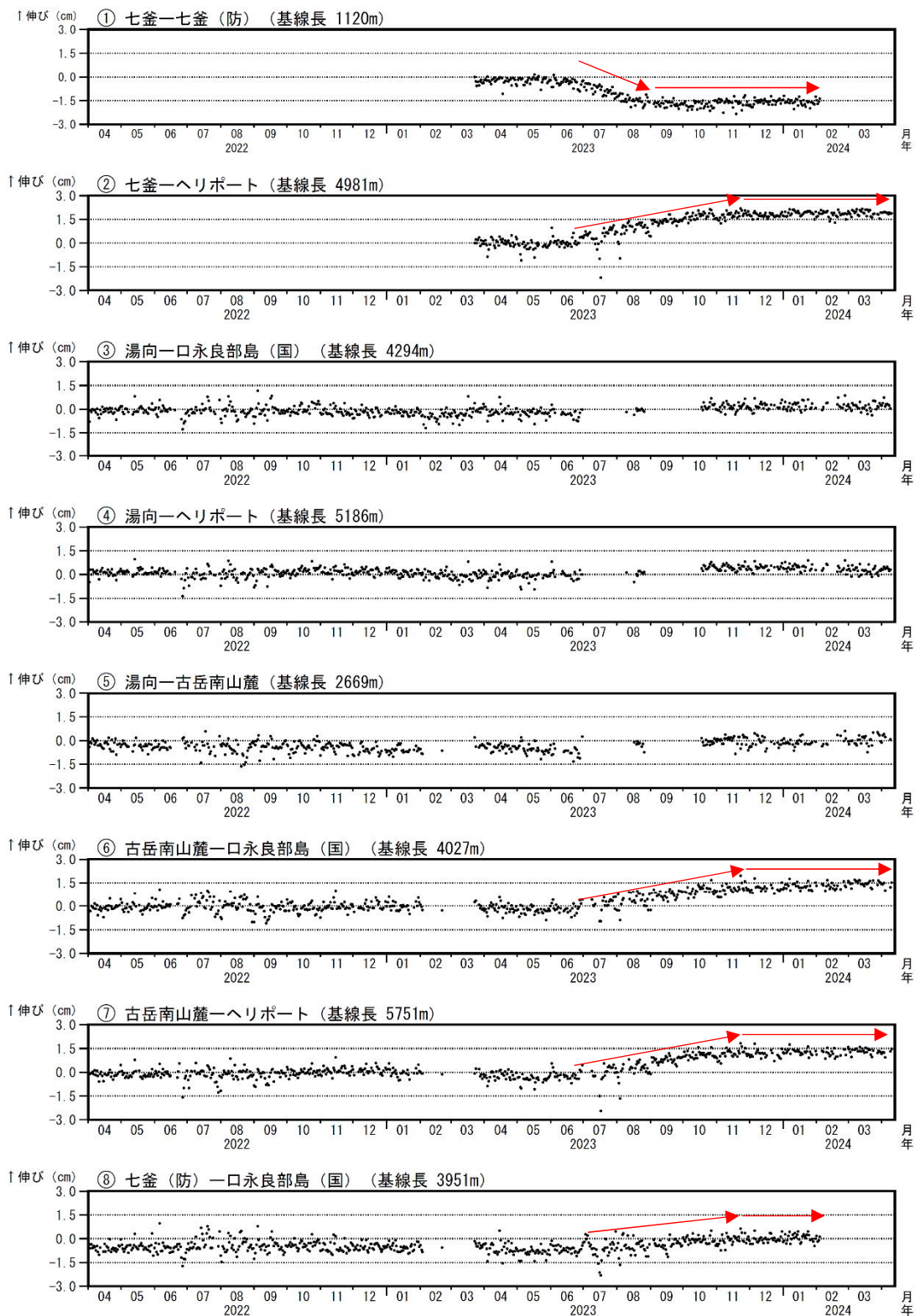


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2022年4月～2024年4月12日)

- ・GNSS 連続観測では、2023年6月下旬頃から古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されていましたが、11月頃から停滞しています(赤矢印)。2023年6月下旬頃からの変動は、古岳近傍の一部の基線(①)では9月頃から停滞しており、その他の基線(②、⑥～⑧)においても11月頃から停滞しています。
- ・現在も古岳付近で膨張した状態が維持されています。

これらの基線は図6の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事(七釜観測点)に伴うステップを補正しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

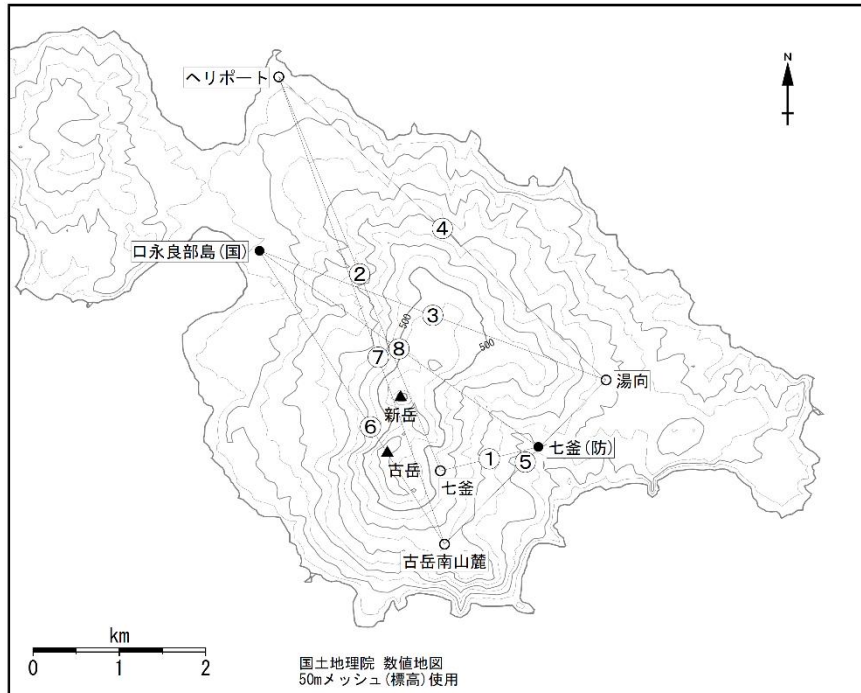


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所

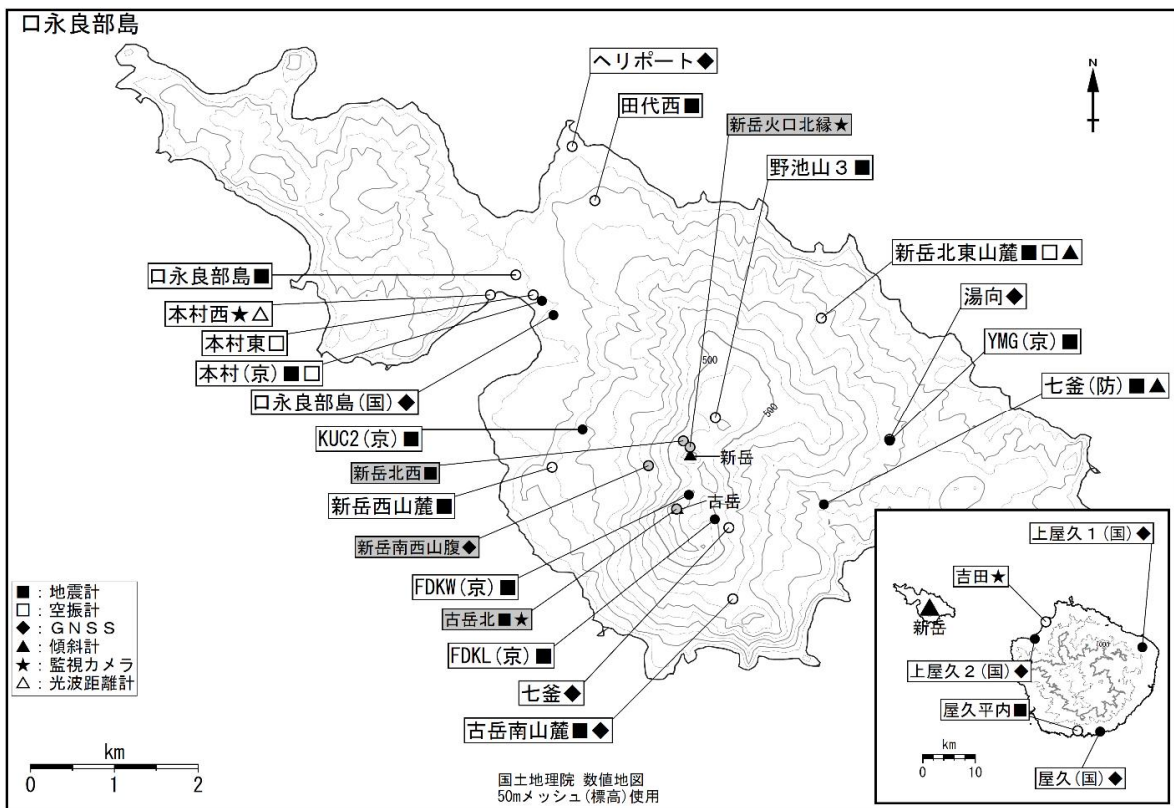


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。